

支えあいの輪を「運営する力」をつけるという視点 ——序にかえて——

学術フロンティア推進事業のプロジェクトでは、対人援助のための「人間環境デザイン」を考えることを共通目標として取り組まれている。子育て支援の活動は、少子化対策という政治的な背景も手伝って各地でさまざまな様態をもってくりひろげられているという点で注目されている「対人援助」の現場である。こうした援助の現場に対して適切な「人間環境」を準備するにはどのような情報を提供しなければならないのかを考え、適切な情報をくみ上げて、いくことが目指されている。

子育て支援活動に関する研究は、発達心理学や保育学の立場からここ数年活発になってきている。どんな問題を取りあげ、何を研究するのかという学問的な視点が定まったものはあまり多いとはいえない。

われわれの研究グループでは、子育てに不安を抱く若い母親が多くなっている原因を、自分の課題として「よい育児ができる」ことを目指していることではないかと考えている。よい母親であること、よい育てかたができることのために努力することが悪いというわけではないが、育児という営みは子どもが育つ環境を整えてやることを土台としているという基本が抜け落ちていることが多い。親自身が社会生活を営むものとしての自覚をもち、責任のある行動をとっていくためには多くの葛藤を乗り越えていく強さが必要になる。それは「課題をこなし、成績で評価される」学校での学びとは異なり、自分で学んでいくものである。

「結婚し子どもを育てるという営みは、親にとって新しい学びの機会である」というのが、われわれの視点である。さらに、子育ては、「親をとりまく社会とのつながり」を視野に入れて考えなくてはならないともとらえている。これまでの研究経過から、保育園の保護者を対象にした「支えあいの輪」という考え方を提案した（高木、2004）。自分の人生を切り開いてきた大人が、子どもを育てる時期に実感する「仲間たち」の大切さを見出し、そこでの自分の大人としての育ちをとらえようとするものである。

一方、子育て支援という概念には、一人で孤立し、不安な子育てをしている人たちへのサービスが基本にある。サービスが提供される場には小さな「仲間」が生まれる。しかし、多くの場合その「仲間」は一時的なもので終わるので、そこでの大人としての育ちをとりあげることは難しかった。ところが、いったんサービスを提供する側として活動に参加するとき、「仲間」の持つ意味は大きく変わることが予想される。理念的には考えられていても、実際の現場が見つからなければ、そこでの参加の様態や問題点などを明らかにすることはできず、絵に描いた餅に終わる。

本研究が出発したのは、こうした運営側に参加するようになった人たちにであったという幸運に導かれている。

次にあげる文章は、「あーべ」の報告書に寄稿するために準備されたものに一部手をいれたものである。われわれと「あーべ」との出会いを語るものとして再掲し、序にかえたい。

「あーべ」の活動にであったのは、2003年の7月、大学時代の先輩で、山形大学では心理学教室から支えてくださった高橋良幸先生が、大学を退職後のお仕事として、奥様の信子先生と立ちあげられた発達支援研究センターの開設記念の行事にお招きをうけたときでした。講演のあとに山形市内で子育て支援の実践を意欲的にすすめてきておられるかたがたによるシンポジウムがもたれ、報告者のひとりに、やまがた育児サークルランドをNPO法人として出発させた野口さんがおられました。その活動の報告からは、子育てをめぐる状況も変化する中で、山形に若い力が育ってきている

ことを実感できました。その日の夕刻のほんの少ない時間を割いて訪問もさせていただき、はじめの直感を確かめることができたので会の運営を賛助する「協力会員」になりました。そして、2004年の3月には成立の経緯や運営の方法などについての聞き取り調査をさせていただくことになったのです。

「あーべ」の活動の特徴は、自分たちの子育てをしながらお互いに「支えあう仲間」をつくりあげるだけでなく、早い段階から、こうした活動を運営するためのリーダーの力をつけていく必要に着目したことにあると思います。自分たちのつくりあげた「支えあいの輪」をうまく運営していくためにも、同じ気持ちで活動している他のサークルとの連携が欠かせないという判断があって、代表の野口さん自身もふくめて「リーダー」としてやっていくために必要な情報や手立て、知識や技能について考えあい、学びあうようになったと伺いました。

その中から「子育て支援」活動には、支援を必要としている当事者の視点に立って考えていくことが不可欠だという信念と、それを実行していく責任とが、ある種の使命感をともなって自覚され始めたのではないのでしょうか。「リーダー」同士の学びあいを広げていくことで、自分自身の視野が広がっていく実感がもてたことが、勉強や研修、利用者との話し合いを通してよりよい運営ができるようにする努力につながっているのだと思います。

私たちの研究グループには、「子育て支援活動」に参加することで「自分がよりよい大人に変化」していると感じられるようになる、「大人としての発達」の過程をとらえていくことを目指している仲間がいます。これまでの発達心理学では、子ども時代は誰もが目をみはるような変化（発達）をとげるのに対して、大人になってからは大きな変化はないような扱われかたをしてきました。でも、現実社会を動かしている組織へ参加していくことには「大人になる」発達の一面をとらえることができるはずですし、子どもの親になるという経験もまた人を大人にしていく契機になると考えられます。「あーべ」の活動に参加している人たちは、それぞれの立場で「大人としての発達」をとげてきているはずだから、きちんと調査をさせていただきたいと考えてお付き合いをはじめたのです。

この目論見は、当初の予測を超えてより大きな展開をみせています。それは「社会の組織を運営していく力をもつ」という、もう一段上の発達を目指した取り組みがなされていることがわかったからです。参加している

仲間を大切にしながらの「組織を運営する力」が、どのように培われていくのかを楽しみに見守りたいと思っています。

編集責任：立命館大学文学部教授
高木 和子

「あーべ」での研究活動記録

2004年

3月：施設見学・おひなまつり茶会参加・一時保育利用者アンケート

参加者：高木・小川・高田・小森・吉本

6月：「あーべ」運営スタッフ16人を対象としたアンケート調査

担当：高木・吉本・常光・小倉

7月：スタッフに対する聞き取り調査

担当：高木・桜谷・吉本・常光・小倉

2005年

2月：やまがた育児サークルランド登録サークルへの質問紙調査

担当：高木・吉本・常光・小倉

文献

高木 和子 2004 子育て支援をめぐる「支えあいの輪」の機能 —
—子どもプロジェクトにおいて核となる概念の位置づけ— 立
命館人間科学研究 第7号 3-12